

第七節 水産業

奄美群島における漁業の歴史をたどると、古くは平家の落人^{おちゆび}たちが内海湾の浅瀬に石を積んで垣を作り、満潮とともに上ってきた魚をその中にとじ込め、干潮になつてから捕獲したといわれ、沖永良部でもこの方法は行われたようである。

「奄美大島水産業沿革史」は、

「古来本諸島一般漁業を見るに原始的な一本釣りで、諸島沿海及び湾内などごく近い海域に出漁していたが、これらは朝夕食膳に供するだけの極めて副業的な遊漁に過ぎなかつた。そしてこれらに使用された漁舟は小さな島舟で、無論沖合漁業及び規模のやや大なる漁業は到底望んでも得られない状態であつた。網漁業としては、山野に自生するバシヨウ・シユロ、サネン、アダン等の繊維で糸を作り、それで網を製し、待ち網と称する張切網やサデイ網で漁をしていた。

このようでは広く一般諸島民の需要を充たすことが出来ず、古来沖縄出稼者に頼つて辛うじてその補いが出来ていたのであ

る。その他、水産加工製品等皆内地から移入され、島内生産では自給自足できない状況であつた。」

「県水産史」は、「南島雑話」によればとして、

「大島近海にはあれだけ魚族が豊富でありながら、なんらの漁業といふべきものがない。ようやく明治の中・後期にさかのぼるだけである。それは何故か？ それは藩当局の方針が奄美の島々全体を黒糖工場化することであり、田を畑として甘蔗作を強制するような非道が平気で行なわれてきた状態であつたら、水産業等に手を出そうにも出せなかつた。いわば全島民が甘蔗作のために生まれてきたような島政の仕組みであつた。このことは、本藩領内の百姓に対して「作、本なし」（作人に学問は不要、作人は字で飯は食わぬともいった。）と訓えて、農学以外の商工水産業に従事することをきびしく取り締つたからである。」

「大島島治概要」（明治四十五年五月）は

「水産業ノ稍々發達ヲ見ルニ至リシハ僅ニ数年以來ノ事ニ屬シ、其以前ニ在リテハ島民殆ド水産業ノ何物タルヲ解セサルモノノ如ク敢テ力ヲ致スモノナカリキ。蓋シ全郡環海ノ地タルニ係ハラス他ト交通ノ便ナカリシヲ以テ、各島何レモ農作ニ依リ糊口ノ糧ヲ得ルニ甘シ、嘗テ之ヲ顧ルモノナカリシニ交通ノ便次第ニ開ケテ生活ノ状態亦漸ク變遷セントスルノ折柄、内地人ノ本郡近海ニ於テ鯉漁業ニ従事シ大利ヲ得タルヲ見、茲ニ始

メテ鯉漁業ヲ経営スルモノアルニ至レリ。是實三十四年以來ノ事ニ係ル爾後鯉漁業ノ有望ナルヲ察シ三十六年來、島費支辨ノ水産技手ヲ島廳ニ置キテ漁撈並ニ製造ノ指導ニ從事セシムルコトヲセシヨリ逐年鯉漁業モ繁盛ニ赴キ、郡民ノ之レニ從事スルモノ千六百餘名漁船七十六艘ヲ算スルニ至レリ。從テ漁業期最盛ノ時期ニハ他地方ヨリノ入漁者ヲ合シテ近海百五拾六艘ノ漁船ヲ見ルニ至リ一箇年ノ漁獲高ハ鯉漁業ノミヲ以テシテ近來貳拾萬圓乃至參拾萬圓ノ巨額ニ上レリ。此他鰯漁業ノ如キ鱸漁業の如キ有望ノ漁業亦少カラス。島廳ニ於テモ現ニ試験船ヲ置キテ各種ノ調査ニ從事シツヽアリ。要スルニ本郡ハ無数ノ島嶼ヨリ成リ加フルニ赤道黒潮ノ暖流ハ其近海ヲ流駛シテ海中無限ノ寶庫ヲ蔵シ漁業ニハ最モ適當ノ地利ヲ占ムルヲ以テ、今後水産業ノ奨励ニ伴ヒ其利得ハ更ニ益々多キヲ加フルニ至ルヘク糖業林業ト共ニ本郡ニ於ケル三大有望事業タルヘキハ信シテ疑ハサル所ナリ、但本郡ノ地ヤ氣候概シテ温暖ナルヲ以テ漁撈方法ノ改善ト同時ニ製造ノ方法ヲ講スルニアラスンハ漁獲残部ハ為メニ空シク腐敗ノ不幸ヲ見ルナシトセス、是亦實ニ考慮ヲ要スルヘキ問題タリ。

将来有望ナル漁業

- 一、鯉釣漁業
 - 一、鱸延縄漁業
 - 一、飛魚網漁業
 - 一、鱸流網漁業
- 一、鮪延縄漁業
 - 一、鯛延縄漁業
 - 一、鯉敷網漁業

目に備える程度の漁業であつた。漁舟も島の舟大工が、島の松材で造つた小さなものであつた。

「奄美史料統計」には、当時の郡内の漁業者・漁獲物等が別表のとおり記録されており、本町でも漁好きな者同士が共同で舟を持ち農業の合間、あるいは夜間出漁し、^{サブラ} 鱸突きやイジヤ魚・万引き釣り、それに喜美留^{イユ}だけで見られる礁湾^{おひま}追込漁（マハダ漁）などが行われていた。漁舟は、長浜を中心に、美瀬浜・西原浜・伊延浜・灣門・内喜名・与和の浜にそれぞれ分散していた。製塩も行われていたが、自給自足はできていなかったようである。

「南島誌」は、明治六年の製塩状況を次のように記している。

「和泊方畦布村・西方永嶺村に塩浜あり。然れどもその製する所甚だ僅少なり。その他海辺の各村は皆早旦潮水を岩に注ぎ、太陽に曝して日暮これを収め煮て塩となす。その多きは塩水一斗にして塩四升を得るといふこの法に由りて各戸塩を製すといへども、耕耘多忙にして暇あらざる時は、皆塩を鹿児島に仰給す。

前項の製法によつて塩を得るといへども、肴饌を調和し魚肉を煮る時、これを用ふるものにしてその平常の如きは、各戸潮

と記してあり、「奄美史」にも

「大島は四面海を環らし、加うるに黒潮の流域に当り、温熱帯に産する種々の魚族は四季共に絶えず来遊して、これが漁獲は産業としても財源としても有望であつたにも拘らず、長い間水産業の発達を見なかつたのは不思議なほどである。ただ僅に農民の副業として、農業の合間／＼に灣内又は沿岸において一本釣りが行われ、それが島民日常の食膳に供せられるに過ぎなかつた。真に漁業らしい漁業の始まつたのは極めて近代のことと記している。」

では、沖永良部島の漁業はどのようであつたらうか。民俗編にも記述したが、沖永良部には昔から「海歩^{ウニエ}ちガツテ家喰^チれ倒しや」と言つて、漁の好きなものは肝心の家業（農業）をおろそかにし、家運を衰退させるという戒めもあつて、堂々と漁ができない状況にあつた。

しかし、現在のように肉などに恵まれていない時代であつたから日常のおかずとして、農業の合間に、特に舟による夜釣りは明治の中ごろから盛んに行われていたようである。

また、冷蔵庫のない時代であつたから、獲れた魚も縁故の者に分け与えたり、あるいは干物にして来るべき節

水を汲みて直に野菜或は唐芋を煮てこれを食べ。」

また、明治三十七年七月、大島郡を一元とした水産組合が設立され、豊島栄・永井實親らがその幹部として経営の任に当たつたが、鯉漁業の衰微とともに昭和十九年解散のやむなきに至つた。

別表一 漁業戶數漁船漁網及漁業人員

村名	漁業戶數		漁船		漁網		漁業人員	
	專業	兼業	三間未滿	三間以上	年未現在	年內新造	全廢用	專業
名瀨村	四	三九七	二	一	二	一	一	四
大和村	四	四四〇	一	一	一	一	一	四
燒內村	四〇〇	二八九	一	一	二	一	一	四
鎮西村	四	九四〇	三	五	九	四	一	一
東方村	四	二二六	三	五	二	三	三	一
住用村	四	三五	一	一	一	一	一	一
龍郷村	四	二〇五	一	一	一	一	一	一
笠利村	四	一四四	一	一	一	一	一	一
喜界村	四	九九	一	一	一	一	一	一
龜津村	八	四九	七	一	七	一	一	一
天城村	八	四九	七	一	七	一	一	一
島尻村	八	一九	一	一	一	一	一	一
和泊村	八	二二	一	一	一	一	一	一
知名村	八	一	一	一	一	一	一	一
與論村	八	五	一	一	一	一	一	一
十島村	四	三〇〇	五	八	二	一	一	一
計	四一六	三〇〇九	五八四	六一	一七四	二七	四〇	四八三

明治四十一年

漁獲物

村名	鰹		鮪		鯛		鱈		文鰹魚		鱈	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價格	數量	價格
名瀨村	四八七五〇	二四三七五	一〇〇	六〇	八〇	四八	三、五〇〇	一、四〇〇	一	一	一	一
大和村	四一、一〇	二、一九九	一〇	四	二二	四	二六〇	一五〇	一	一	一	一
燒內村	二四、七二五	八五、六八〇	一六〇	八〇	一〇	四	九〇〇	二八	一	一	一	一
鎮西村	三三、五五二	二四、四六五	一七九	九三	一〇	四	九〇〇	二八	一	一	一	一
東方村	七、九六〇	三、七四一	五八五〇	二、五二六	二六八	一〇二	一五〇	一	一	一	一	一
住用村	一、二七四	五八七	三〇〇	一五〇	一五〇	一〇二	一	一	一	一	一	一
龍郷村	一、二七四	五八七	三〇〇	一五〇	一五〇	一〇二	一	一	一	一	一	一
笠利村	一、二七四	五八七	三〇〇	一五〇	一五〇	一〇二	一	一	一	一	一	一
喜界村	一、二七四	五八七	三〇〇	一五〇	一五〇	一〇二	一	一	一	一	一	一
龜津村	一、二七四	五八七	三〇〇	一五〇	一五〇	一〇二	一	一	一	一	一	一
天城村	一、二七四	五八七	三〇〇	一五〇	一五〇	一〇二	一	一	一	一	一	一
島尻村	一、二七四	五八七	三〇〇	一五〇	一五〇	一〇二	一	一	一	一	一	一
和泊村	一、二七四	五八七	三〇〇	一五〇	一五〇	一〇二	一	一	一	一	一	一
知名村	一、二七四	五八七	三〇〇	一五〇	一五〇	一〇二	一	一	一	一	一	一
與論村	一、二七四	五八七	三〇〇	一五〇	一五〇	一〇二	一	一	一	一	一	一
十島村	一六、七七五	一六、一〇四	二五〇	一八七	六四〇	四〇	四〇	一	一	一	一	一
計	一六四、〇四六	一七七、一五二	六五三九	二、九三六	一、二八六	六八八	五、五〇〇	二、〇五三	五、四九〇	二、六一八	七五二	五二〇

明治四十一年

村名	製塩戸数	全竈数	鹽田反数	産額	
				数量	価額
名瀬村	一、七〇〇	三二	四	一九二	一、三四四
大和村	九二〇	七〇	一	五〇〇	二、五〇〇
焼内村	一五五	三三	一	三三〇	一、七五〇
鎮西村	八五〇	四一	一	一、三三〇	六、六五〇
東方村	三三	一五	一	二三八	一、八二四
住用村	六〇	九七	四	一三〇	一、〇四〇
龍郷村	三三二	四〇	一	四八〇	三、三六〇
笠利村	二二〇	九七	二	？	？
喜界村	一一〇	四〇	一	？	？
龜津村	一一〇	九七	四	四八〇	三、三六〇
天城村	一〇〇	三三	一	一三〇	一、〇四〇
島尻村	二二〇	一五	一	二三八	一、八二四
和泊村	一一二	一五	一	二三八	一、八二四
知名村	一一二	一五	一	二三八	一、八二四
與論村	一一二	一五	一	二三八	一、八二四
十島村	一一二	一五	一	二三八	一、八二四
計	五、二五四	一、四一九	二・二	三、四〇四	一九、四三八

製塩

明治四十一年

村名	烏賊		鮪		鱈		鱧		其他		合計
	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額	
名瀬村	一、八五〇	七四〇	四五〇	一八〇	二二〇	八〇	二六、八八三	二二、五〇三	八六、一一〇	二六、八八三	二六、八八三
大和村	三三〇	九六	五〇	二〇	二二〇	八〇	二二、五〇三	八六、一一〇	二四、六二〇	八六、一一〇	二二、五〇三
焼内村	五〇	一六	一五〇	四五	四五	一八	八六、一一〇	二四、六二〇	六、七五二	八六、一一〇	八六、一一〇
鎮西村	四〇	一六	六七	二八	二八	一八	八六、一一〇	二四、六二〇	三、三三三	八六、一一〇	二四、六二〇
東方村	八〇	三〇	一六〇	五〇	五〇	一八	八六、一一〇	二四、六二〇	一、三三二	八六、一一〇	六、七五二
住用村	一五	六	二〇	七	七	一八	八六、一一〇	二四、六二〇	一、三三二	八六、一一〇	八四八
龍郷村	五五	二八	五〇	二〇	二〇	一八	八六、一一〇	二四、六二〇	一、三三二	八六、一一〇	六三五
笠利村	一三〇	五七	四四八	九四	九四	一八	八六、一一〇	二四、六二〇	一、三三二	八六、一一〇	一、五七九
喜界村	六八	三四	一一三	四九	四九	一八	八六、一一〇	二四、六二〇	一、三三二	八六、一一〇	三、〇一五
龜津村	一五〇	五六	二五〇	七八	七八	一八	八六、一一〇	二四、六二〇	一、三三二	八六、一一〇	六八一
天城村	一〇〇	六三	三〇〇	一三二	一三二	一八	八六、一一〇	二四、六二〇	一、三三二	八六、一一〇	九五二
島尻村	二三〇	一一五	一五〇	五六	五六	一八	八六、一一〇	二四、六二〇	一、三三二	八六、一一〇	二、六八〇
和泊村	一一二	四二	二二	七	七	一八	八六、一一〇	二四、六二〇	一、三三二	八六、一一〇	一、一六二
知名村	一一二	四二	二二	七	七	一八	八六、一一〇	二四、六二〇	一、三三二	八六、一一〇	一、一六二
與論村	一一二	四二	二二	七	七	一八	八六、一一〇	二四、六二〇	一、三三二	八六、一一〇	一、一六二
十島村	一一二	四二	二二	七	七	一八	八六、一一〇	二四、六二〇	一、三三二	八六、一一〇	一、一六二
計	三、二〇〇	一、二九九	二、二三九	七六六	二、四二〇	一、二二〇	一、二二〇	一、二二〇	一、五三二	一、五三二	一、五三二